

公文さま

- ◇ アメリカには駐在経験が無く、出張・観光だけなので移動は飛行機中心であり、長距離運転した事はないのですが、現地スタッフが運転する車に同乗した経験で感想を書きます。先輩の92年の記事の頃は、イギリスから帰国して数年経ち、まだヨーロッパの仕事の続きが残っていて、新たにフランス南部のモンペリエに合弁会社を作っている時期ですが、アメリカのヒューストンにある子会社の非常勤役員も兼務していてヒューストンを度々訪問した時期です。東京からはロサンゼルス乗り換えのヒューストン行きが便利でしたが、重電部門のアメリカ支社があるサンフランシスコを経由すると、帰りに知人・友人と美味しいものを食べて帰れるので、ロサンゼルス経由は少なかったと思います。
- ◇ 先輩の記事を見て、一言で言うと「日本車で **2千数百キロを3日間と聞いただけで、ただ驚くばかりです**」。若くて毎日700km以上走っても大丈夫だったのですね～！アメリカの制限速度は意外に遅くて55マイル、最大65マイルが多くて70マイルの道路は、だだっ広いテキサスや東海岸側で通った事がありますが、先輩が走った道路はそんなに早くはないと思います。制限速度を数字でみるとイギリスと同じ程度ですが、大きな違いは、イギリスは車線が少なく、最高70マイルでもそんなに厳しくなく、高速道路でも私は80マイル、妻は時々90マイルでしたが、捕まった事はありません。ま～日本と同じ感じですよ。高速道路で110マイル以上で走っている車を捕まえたら、あの**ダイアナ妃**だったので、驚いた警官が「お気をつけて運転してください」と、言ったとか？彼女の最後はパリのアルマ橋のたもとで車の中でした。（余談：小さな緑地がモニュメントです）
- ◇ アメリカの主な道路は車線が多く、車線毎に信号灯が付いている。またサンフランシスコやロサンゼルスなどの市街には歩道があるが、テキサスなどは歩道がない。近所にも車で行くし、交差点には横断歩道が無いので右端車線には信号灯が無く、何時でも右折できる、そして**みんな制限速度で走っている**。自宅の駐車場も帰宅したら停車し、出発する時はそのまま前進する。ショッピングセンターなども同じで「常に前進あるのみ」、感心する事は沢山あります。筆者の友人の奥様は、駐在の3年間に一度もギアをバックに入れた事が無い、と仰っていました。ヒューストン市街の交通も見事で人と車が平面で交差しません。
- ◇ 初めてロッキー山脈を飛行機で越えたのは、**1978年**12月で、成田空港が開港した年でした。成田空港のターミナルビルがサンフランシスコのターミナルビルをモデルにして設計されたので、主ビルの両側にサブ・ビルがあり、ウイングと呼んでいました。成田の第1ターミナルは「**北ウイングと南ウイングの二つの大きな翼で世界に羽ばたこう！**」と、ビル全体が大きな鳥のような宣伝だったと思います。その時は、ダラス・フォートワースまでデルタ航空でしたが、天気が良くて窓から外を眺めていて、子供の頃に感動しながら見たウォルト・ディズニーのドキュメント映画「**砂漠は生きている**」を思い出しながら、うっとりしていたら、「**グランドキャニオンが見えています**」と、機内アナウンスがあり、コロラド川を横切りながら、感激しました。
- ◇ 下に、サンフランシスコ及びロサンゼルスからダラス及びヒューストンへの航路図を貼り付けます。主力機材がボーイング747型ジャンボジェット時代で、エンジンが4基もあり安心感がありましたが、50トンの貨客 Payload を運ぶのに、機体重量150トン、燃料150トンが必要で航続距離が短く、東京からはアラスカのアンカレッジで燃料補給をしていました。その後のボーイング777、そして787になるとエンジン2基で航続距離が伸びて、ノンストップでアメリカの主要空港へ行くようになりました。

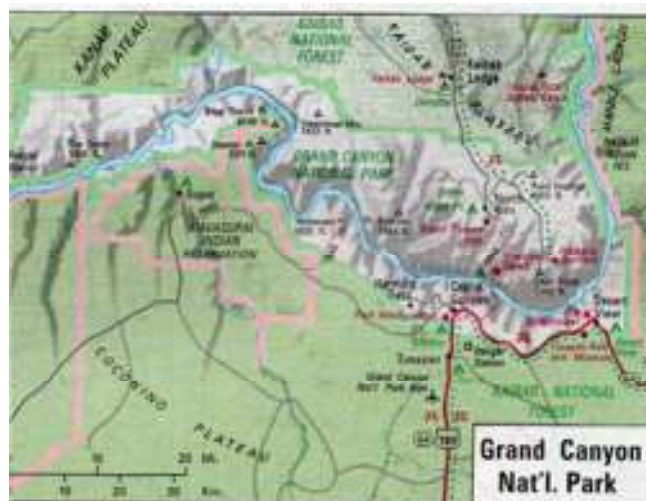


- ◇ 前述の1978年の初めてのロッキー山脈越えのアルバムから、窓からみたロッキー山脈の写真とコロラド川のグランドキャニオンの

地図を添付します。筆者の席は窓側ではなかったし、小型カメラなので、グランドキャニオンは見たのに写真がありません。

ヒューストンに行くことが多かったので、コロラド川を横切った事は何回もあります。時刻・座席・天気・航空路で微妙に違い、コロラド川はいつも見えるが、グランドキャニオンは初回以上によく見えた事はありません。

いつか、地べたを歩いて見に行きたいな～と思ったことでしたが、先日 78 歳になり、もう行けません。



- ◇ ロサンゼルスから東へ行く道路と言えば**ルート 66**が思い浮かびますが、開通後 100 年経ち、現在の地図には無いですね～？茶色の道路標識で **Historical Route 66** として示されているようです。

投稿に添付されている地図の地名では、**ネヴァダ州**の**ラスベガス**には何回か、またユタ州の**ソールトレイク・シティー**には一泊だけ行きました。モルモン教徒の町で酒が飲めない **Dry Town** と言っていました。酒（竹）本さんが行くはずはないが、重要な展示会があるラスヴェガスへ行く飛行機便が取れなくて、仕方なく、東京ーポートランド（オレゴン）ーソールトレイク・シティー（一泊）ーラスベガスの便で行っただけです。ラスヴェガスで余裕ができて、コロラド川の**フーバーダム**と水力発電所を見学しました。ロッキー山脈の雪が徐々に解けてダムを満杯にしていました、（水の位置エネルギーが満杯）。

水力発電が多い東北電力の人達は、降雪が多いと喜び、雪山を見上げながら「**白い石炭**」と喜んでいました。

- ◇ **ネヴァダ州**のラスヴェガスはアメリカの友人の説明では、二番目の金持ちが行く **Casino**(カシーノ)で一番の金持ちは**モナコ公国**のモンテカルロへ行くとの事。（余談ですが、筆者は賭け事はしないがモンテカルロには妻と観光で 2 度行きました。）ネヴァダ州はカシーノ以外は、砂漠と空軍の施設だけです。航空機・ドローン・搭載ミサイル……あらゆる危険な軍需品の実験場があり、その**危険な空域**は **Area51** と呼ばれて、軍関係以外は近寄れません。

背番号 51 のイチローが守備するライト側の外野席には、**A-51** だったかのサインボードを掲げるファンがいましたが、「この近辺はどこへ打ってもイチローに取られる危険な所」の意味でした。現在は～ロサンゼルスにもっとすごい日本人が毎日活躍していますね～？朝刊には 31 号と書いてあるのに、テレビでは 32 号と言っている、と書いて一晩経ったら、33 号になっている、大谷は怪物ですね～楽しみですね～！

- ◇ ロサンゼルスからヒューストンへの飛行機の経験で忘れられないのは、**緊急着陸事件**です。1994 年 6 月末に南仏**モンペリエ**に出張予定の時に、ヒューストンで事件が起きて、東京ーロサンゼルスーヒューストンーロンドンーパリーモンペリエー東京と地球の回転に逆らって**東周りで地球一周**した時の**東京ーロサンゼルスーヒューストン**の部分の事です。ロサンゼルス空港を離陸してロッキー山脈に差し掛かった頃に、「**コミュニケーション・システムに異常**が発生したので、ロサンゼルス空港に引き返す」とのアナウンスがあり、ロサンゼルスのアーヴァイン沖の海の上で何回も旋回しながら 1 時間近く燃料を海上投下し、右側にロサンゼルスの街を見ながら北西に向かい、高度を下げながら滑走路に侵入し、滑走路と平行する誘導路（taxiway）を並走する赤い消防車と黄色のレスキュー車の列を見ながら無事着陸しました。この時の写真は、21 年 2 月 18 日付で「飛行機故障の経験」の標題で KPC に投稿しました。その中から 3 枚の写真を下に貼り付けます。飛行機故障の緊急着陸は前年の成田空港に続いて 2 回目で、恐怖は無かったが、飛行機は取り替えたが、乗務員は下りてしまい、交代要員がなくて 5～6 時間遅れ、筆者はこれを「**ロスタイム**」と表現しました。初めての東回り世界一周で移動する

たびに1日が15～20時間になり、寝不足の連続でした。教訓、「東西の移動は太陽を追っかけながら」です。



ロサンゼルス湾？に燃料を投下中



アナウンスとは異なり2基のエンジンの1基が焦げていた

- ◇ 懐かしい西部劇が引用されていますが、あの頃は「自分は白人の味方のつもりで見ており、白人に襲い掛かるインディアンは悪い人々」と信じていて、インディアンに勝つのが嬉しかったと思います～、ジョン・ウエインの**巻き舌英語**が本当の英語と思ってマネをした事でした。しかし、あの英語の発音は、「400年間イギリスの植民地だったアイルランドでは強制的にゲール語（アイルランド語）を禁止され、英語を喋らされた人達の発音であり、イギリス人が入植したマサチューセッツ州などアメリカ北東部の英語とかなり違っていました。日本が朝鮮半島を同じように植民地化し、日本語を覚えさせられた朝鮮人が、どこか外国で日本語を教えると、変わったアクセントの日本語が広がる・・・」ような事だ、と教えられた事でした。私のロンドン時代の秘書はアイルランド人で現在も親戚以上の付き合いです。

イギリスがEUから離脱し、ロンドンに拠点を置いてきた日本などの英語中心の企業のEU拠点が、ロンドンからアイルランドの首都ダブリンに移転し、皮肉にも、強制された英語のお陰でアイルランドは栄えています。イギリス領北アイルランドの中に塀で囲まれた（カトリックの）アイルランド人の居住地域もあり、まだしばらくゴタゴタが続くでしょう。

長話をしました、何かお役に立つことがあれば・・・と思っています。

竹本 修文